



黒マント



の怪人

川崎ゆきお

「マントだよマント」

「佐伯さんが言うと、怪人のマントを連想します」

「インパネスとかね」

昔ながらの怪奇探偵小説を書いている佐伯だが、そんなものが売れるわけがない。しかも怪奇ゴシック小説の古典的描写だ。怪奇小説なのか、探偵小説なのか が曖昧だ。トリックがうまく機能せず、話が見えなくなったあたりで怪奇小説やホラー小説に切り替わるようだ。

「少し寒くなったでしょ。そのせいかもしれないけど、見かけたんだ。マントを」

「はい」

「中年近い女性だが、向こうから大きな膨らみが来るんだ。まるで帆船だ。膨らみが変わる。風でね。だから、小さな小舟だろう。ボート程度の帆船。その風 でなびいているマントがいいんだなあ。股あたりまである。風呂敷を被っているようなものだが、あれはマントだ。昔はトンビって言ったやつだが、私から見るとコウモリだ」

「昔は、着物の上から羽織っていましたねえ。袖のないコートのようなもの。インパネスでしょ」

「インパネスにも長いタイプは袖があるんだ。だからマントとは違う。黄金バットや月光仮面が背中につけているやつだよ」

「どうして、あんな邪魔なのをつけているんでしょう。結構薄着なので、寒いのかしら」

「さらに昔は股旅物であるねえ。縞の合羽に三度笠ってね」

「合羽は、雨具ですか」

「まあ、関東なんかだと風が強いから防風機能もあったんだらうねえ。当然防寒用でもある。しかし、縞の合羽じゃ怪人はだめだ。インパネスは素人だ。マントになるとプロだよ。だから怪人はマントだ」

「胸までのマントのようなものを、女性がつけてますねえ」

「あれは、肩が冷えるんだらうねえ。ピッチャーでもないのに」

「それで」

「それでね、さっき見たマントの女性。あれをやりたい」

「佐伯先生がですか」

「そうだ」

「男性は無理ですよ。ただ、着物を着た場合は、いいんじゃないですか。初詣なんかで、和服の男性が着てますよ」

「黒いスーツの上からがいい」

「それは目立ちますよ」

「着ているものを見せないために、首から下まで全部隠せるマントがあるんだ。ファッションショーなんかで、着ているものを見せないようにね」

「それは薄いでしょ」

「そうなんだ。やはり生地はビロードだね。少し光沢があり、芝居の幕のようにね。幕は二枚あるんだ。錦の御旗のような刺繍のある緞帳じゃなく、内側の幕ね。緞帳は上からだが、内側の幕

は横からだ。あれがいい。そしてマントは裏が赤で表が黒」

「無理ですよ先生、そんなもので、歩けないですよ」

「そうになると、帽子も必要だ。これは難しい。やはりそうになると、古典だね。怪人二十面相、アルセーヌルパン、あの円筒形の高いやつね。探偵なら鹿打ち帽だね。ホームズだよ」

「山高帽は手品師が被っているやつでしょ。あの中からハトが出てくる」

「あの空間はハトを隠すためのものじゃなく、背が高く見える」

「蒸れないように開けてあるんじゃないですか。髪の毛が崩れないように」

「ああ、そうかもしれんねえ」

「しかし、男性でマントは無理です」

「女性はいいいのか」

「それも限られた人だけでしょ。やはり勇気がいるのかも。袖がないのですからね。小さいのならいいですが、足元までとなると、これはもう違います。それより先生、締め切りが近いので、いつもの怪奇探偵小説、よろしくお願いします」

「同人誌では気合いが入らないよ」

「原稿料は支払います」

「もっと有名になれば、黒いマントを着て歩けるだろうねえ。有名人ならいいだろ」

「そうです」

「しかし、同人誌じゃ、有名になれんだろ」

「いえいえ」

「だからネタもない」

「じゃ、その怪人マントの男で」

「ああ、それを書くか」

「変質者ものにしないでくださいよ」

「ああ、中はスーツだ。大丈夫」

「はい、よろしくお願いします」

了